

幼児期から中学生の家庭教育調査研究会

# 幼児期から中学生の 家庭教育調査 縦断調査

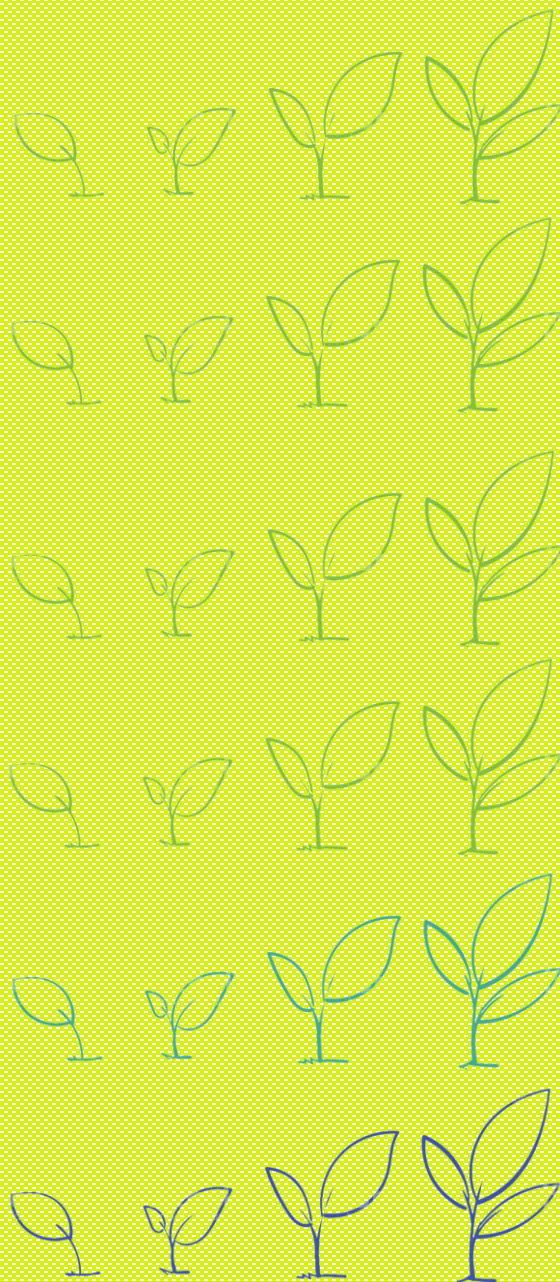
## ダイジェスト版

——幼児期から中学1年までの  
縦断調査データから、  
発達プロセスと  
保護者のかかわりを明らかにする——

2023年9月

ベネッセ教育総合研究所

<https://berd.benesse.jp/>



### CONTENTS

本調査について、調査概要、基本属性	2
調査結果ハイライト	4
第1章 年少児から小学1年までの流れ	6
第2章 小学2年から5年までの流れ	10
第3章 小学6年から中学1年までの流れ	14
第4章 年少児から中学1年までの流れ	18
解説—専門の立場から	21
参考資料—調査対象の子どもの 生育史と時代環境	23

## ◆ 本調査について

本調査は、幼児期から中学生までの子どもの発達と保護者のかかわりとの関連性について明らかにする目的で実施しました。2012年に年少児だった子どもを中学卒業時まで継続して追跡することで、子どもの成長・発達プロセスと保護者の子育ての変化を捉えています。このダイジェスト版では、年少児期から中学1年までの縦断調査の結果を分析しています。

## ◆ 本調査の特徴

### 1. 子どもの生活や発達、保護者の子育ての変化を捉えることができる

本調査は、年少児から中学1年までの10年間を通して、可能な限り同じ項目を設定して調査を行いました。そのため、子どもの成長・発達と家庭での保護者のかかわりの変化を捉えています。

### 2. 子どもの成長・発達プロセスと保護者の子どもへのかかわりとの関連性をみることができる

本調査では、幼児期をベースに小学校以降の学びにスムーズに適応するために必要とされる力、生涯にわたって求められる力について検討し、学びに向かう力、認知、生活習慣・学習態度に軸を置いて、子どもの成長・発達プロセスと保護者のかかわりとの関連性を把握しています。

## 調査概要

- **方法** 郵送法（自記式質問紙調査）
- **地域** 全国
- **対象** 2012年に年少児の子どもを持つ保護者  
※ 子ども：小学4年・5年・中学1年に実施
- **時期** 2012年から毎年2～3月に実施

調査年	子どもの学年	発送数	回収数 (保護者)	回収率 (保護者)	分析対象数 (保護者)
2012	年少児	2,400	2,277	94.9%	1,905
2013	年中児	1,905	1,585	83.2%	1,460
2014	年長児	1,203	1,077	89.5%	1,074
2015	小学1年	622	552	88.7%	544
2016	小学2年	544	483	88.8%	479
2017	小学3年	479	445	92.9%	444
2018	小学4年	444	405	91.2%	402
2019	小学5年	402	385	95.8%	385
2020	小学6年	398	351	88.2%	340
2021	中学1年	398	347	87.2%	307

- ※ 本調査では、同じ子どもの発達や生活の変化を捉えるため、年少児以降の縦断調査に同意し、調査に中断することなく回答した保護者のデータを分析した。子どものデータは中学1年のみを使用した。
- ※ 子ども調査の回収数・回収率：小学4年 回収数206、小学5年 回収数220、中学1年 回収数217。
- ※ 調査対象者は、全国のリストから、子どもの年齢（6か月区分）・性別をもとに均等割り付けに応じてランダム抽出した。
- ※ 年少児は3歳児クラス、年中児は4歳児クラス、年長児は5歳児クラスに通う子どもを表している。
- ※ 2020・2021年は、2019年調査対象者へ発送している（一部除外）。
- ※ 図表で使用している百分率（%）は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

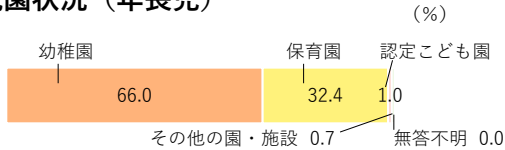
- **主な調査項目** 起床、就寝時刻、就園・就学状況、メディア利用時間・内容・目的・使い方、認知発達、社会情動的発達、読書、習い事、通塾、生活習慣・学習態度、養育態度・養育行動、子育て肯定感・否定感、子育て観・教育観、生活満足度、子どもと過ごす時間、読み聞かせ、園・学校とのかかわりなど

## 基本属性

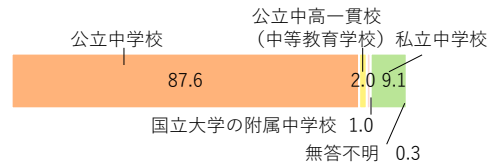
※基本属性は、年少児から中学1年まで継続して回答した母保護者の数値。

- **子どもの性別** 男 44.3%、女 55.7%
- **子どもの出生順位** 1 番目 45.3%、2 番目 46.6%、3 番目 7.2%、4 番目以降 1.0%

### ● 就園状況（年長児）

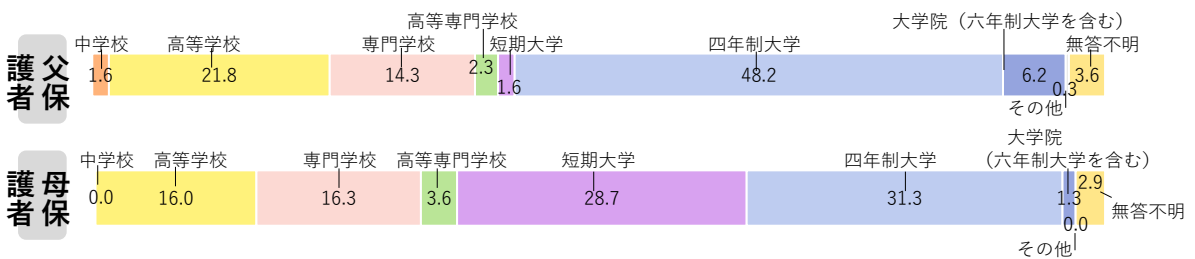


### ● 中学校の状況（中学1年）

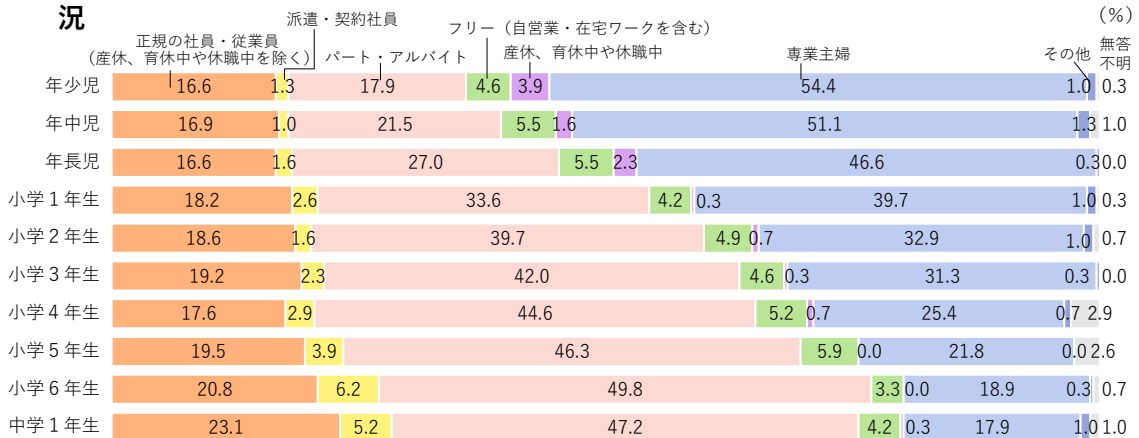


- **保護者の平均年齢（年少児）** 父保護者 38.5歳、母保護者 36.8歳

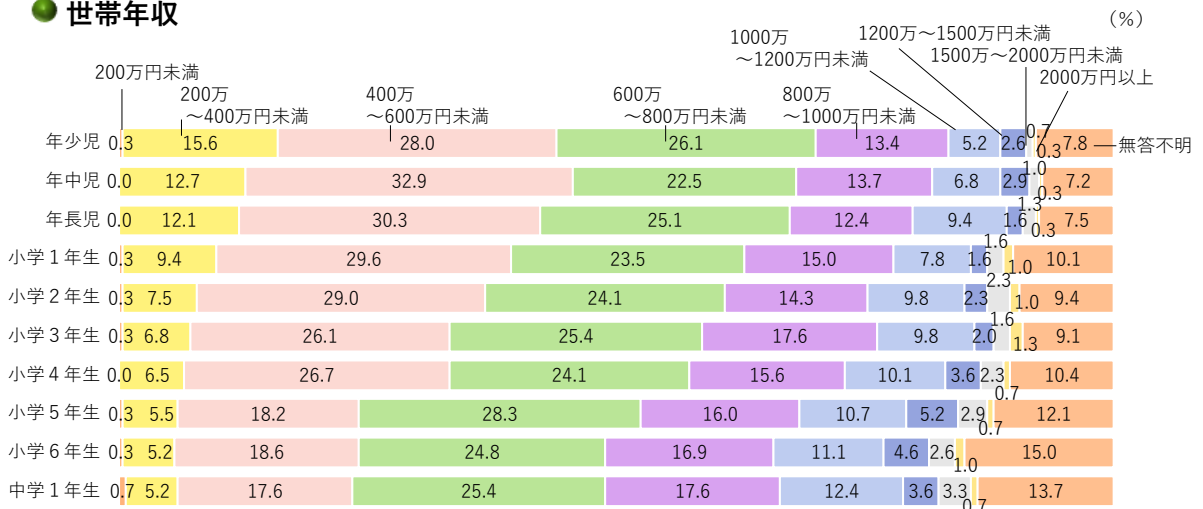
### ● 保護者の最終学歴



### ● 母保護者の就業状況



### ● 世帯年収



調査の枠組みとして、子どもの発達プロセスと保護者のかかわりを明らかにするために用いた項目について説明する。また、本調査の結果のサマリーを紹介する。

調査の枠組みについて

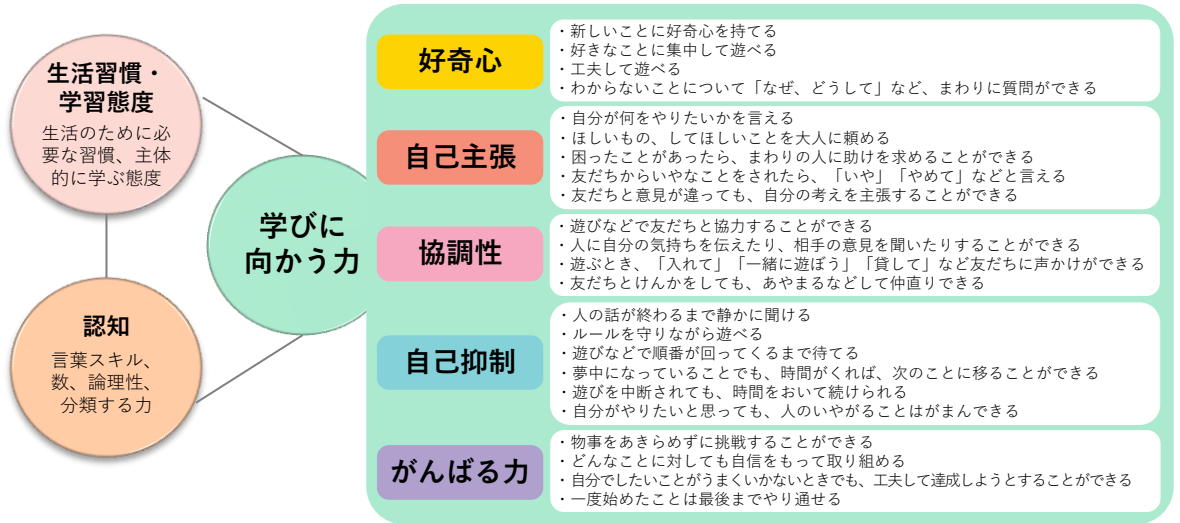
1 分析で注目した子どもの発達

この調査では、幼児期から中学生までの学びのプロセスを把握するために、3つの軸：《生活習慣・学習態度》《学びに向かう力》《認知》を設定した。生活や学びの基盤としての生活習慣や学習態度、情動的な側面としての学びに向かう力、そして認知的な側面である。幼児期から小学校入学の時期にかけては、学校生活に移行し適応するために必要な力として、小学生以上では、自ら学び続け、課題を解決するために必要な力として捉えている。

3つの軸	幼児期	小学生以上
生活習慣・学習態度	生活習慣	学習態度
学びに向かう力	好奇心／自己主張／協調性／自己抑制／がんばる力	
認知	言葉スキル／数／論理性／分類する力	言葉スキル／数／論理性

※ 言葉スキル：かなや漢字・文章を正しく書ける力

※ 論理性：原因と結果のつながりを考えたり、相手と自分の意見を比べたりしながら、話したり、書いたりできる力



2 子どもが育つ環境としての保護者

本調査では、子どもが育つ環境としての保護者に注目した。さらに子どもが幼児から中学生になるまでを通してみたとき、保護者の果たす役割はどのように変わっていくのかも追跡している。本調査では、サンプル数が多かった母保護者の回答を対象に分析している。

幼児期から中学生までの保護者のかかわりとして、「養育態度」「働きかけ」の調査項目を因子分析を用いて以下のように設定した。

かかわり	内容	項目の代表例
養育態度	意欲の尊重	「子どもがやりたいことを尊重し、支援している」など。
働きかけ	思考の促し	「子どもの質問に対して、自分で考えられるように促している」など。
	教科への興味の刺激 ※ 小学2年以降	「身近なことに関連付けて考えさせる」など。
	学習習慣の形成 ※ 小学2年以降	「子どもが勉強の計画を立てるのを手伝う」など。

※ 発達に合わせて、幼児期と小学生、中学生で項目内容と項目数は若干異なる。  
詳細な項目については、6ページ以降の各年齢区分の分析を参照。

### 3 子どもの発達に保護者のかかわりはどう影響するか

- 子どもの発達に、同時期に作用する保護者のかかわりは何か？(→18ページへ)
- 小学生の子どもの発達につながった幼児期の保護者のかかわりは何か？(→19ページへ)
- 幼児期の読み聞かせ活動は小学校以降の子どもの読書行動や言葉スキル・論理性にどうつながるのか？(→20ページへ)



## 調査結果ハイライト



### ① 年少児～小学1年：第1章 6～9ページ

年少児から小学1年にかけて、「協調性」「自己抑制」「がんばる力」はゆるやかに増加し、「言葉スキル」「数」は急速に増加する。年少児の《生活習慣》が年中児の「協調性」につながり、年長児の「言葉スキル」につながっている。幼児期に《生活習慣》《学びに向かう力》《認知》の発達を培うことが小学1年の《学習態度》につながる。

### ② 小学2年～5年：第2章 10～13ページ

小学2年から小学5年にかけて「好奇心」と「自己主張」は減少、「言葉スキル」と「論理性」も小学3年から小学4年に減少する。保護者の「思考の促し」「教科への興味の刺激」「学習習慣の形成」といったかかわりは、いずれも減少する。保護者の「教科への興味の刺激」を高群と低群別に比較すると、子どもの《学びに向かう力》《認知》は高群のほうが平均値が有意に高い。

### ③ 小学6年～中学1年：第3章 14～17ページ

小学6年から中学1年にかけて、「好奇心」「協調性」「がんばる力」はやや減少する。《学習態度》は、ほとんど変化がみられない。保護者の「思考の促し」はやや減少するが、「学習習慣の形成」は増加する。より具体的に勉強の計画を手伝ったり勉強の仕方と一緒に考えていることがわかる。「教科への興味の刺激」は小学6年から中学1年にかけてやや減少する。

### ④ 年少児～中学1年までの流れ：第4章 18～20ページ

保護者の「意欲の尊重」「思考の促し」は、幼児期から小学校低学年での子どもの《学びに向かう力》や《生活習慣》《学習態度》に影響する。幼児期の読み聞かせ頻度が小学校の時期の子ども自身によるひとり読みにつながり、中学1年の言葉スキルや論理性につながる。

年少児～小学1年の学びに向かう力と生活習慣の発達

協調性、自己抑制、がんばる力は、ゆるやかに増加する

第1章では、年少児から小学1年を通して回答した544名について分析している（保護者回答）。年少児から小学1年にかけての《学びに向かう力》の変化についてみている。「好奇心」「自己主張」「協調性」「自己抑制」「がんばる力」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を示した。

Q. 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図1-1-1 好奇心

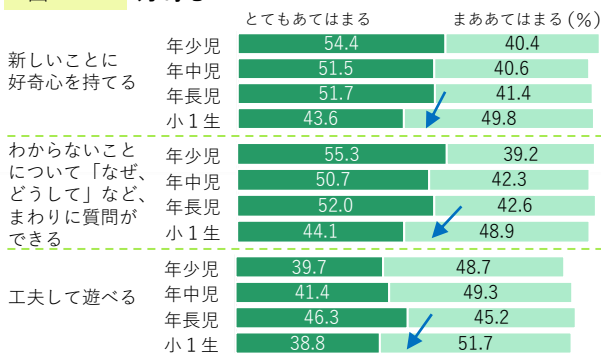


図1-1-2 自己主張

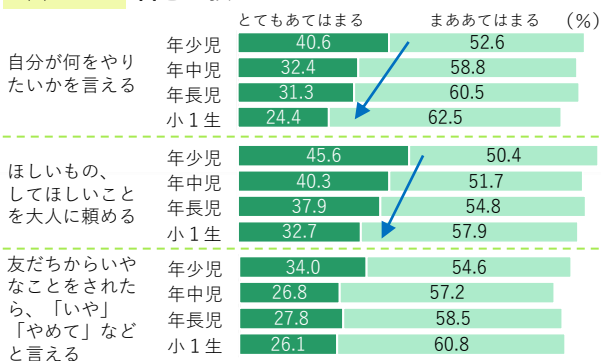


図1-1-3 協調性

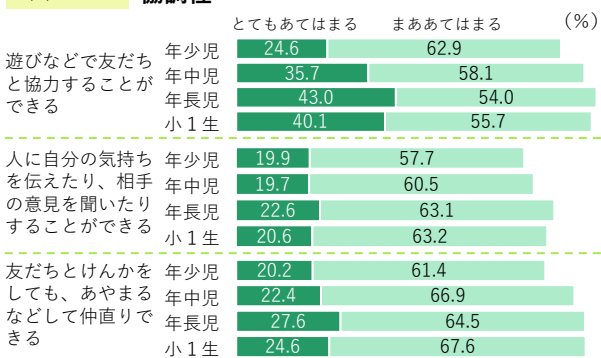


図1-1-4 自己抑制

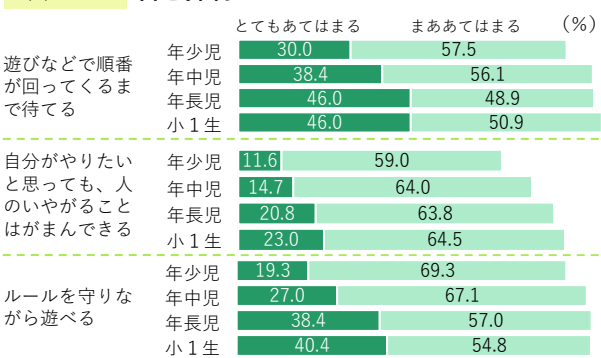


図1-1-5 がんばる力

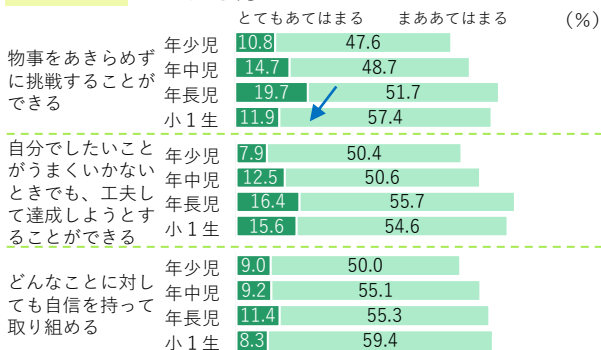
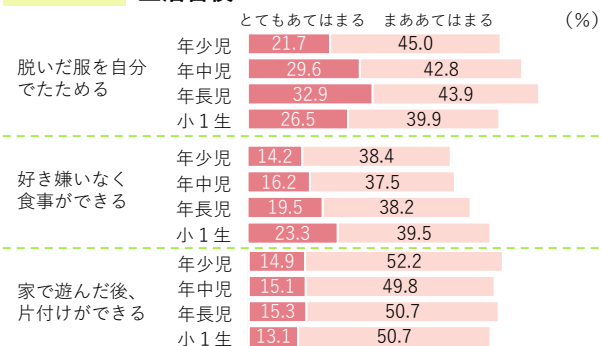


図1-1-6 生活習慣



- ・「好奇心」は年少児から高く、「協調性」「自己抑制」「がんばる力」は年少児から年長児にかけてゆるやかに比率が増加するが、年長児から小学1年にかけて減少する項目がみられる。例えば「新しいことに好奇心を持てる」では、「とてもあてはまる」比率が年長児では51.7%だったが、小学1年では43.6%だった(図1-1-1)。「自己主張」は、年少児の比率が最も高く、年齢が上がるとともに徐々に減少する(図1-1-2)。
- ・《生活習慣》は、「脱いだ服を自分でたためる」「好き嫌いなく食事ができる」など年齢が上がるにつれて比率が増加する項目がある一方で、「家で遊んだ後、片付けができる」などの年齢による変化がほとんどみられない項目もある。

年少児～小学1年の認知の発達

文字・数の力は大きく増加

年少児から小学1年の認知はどのように変化しただろうか。「言葉スキル」「数」「論理性」「分類する力」の4領域をみたものが図1-2-1～4である。合わせて、小学1年の《学習態度》の変化もみている。

Q. 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図1-2-1 言葉スキル

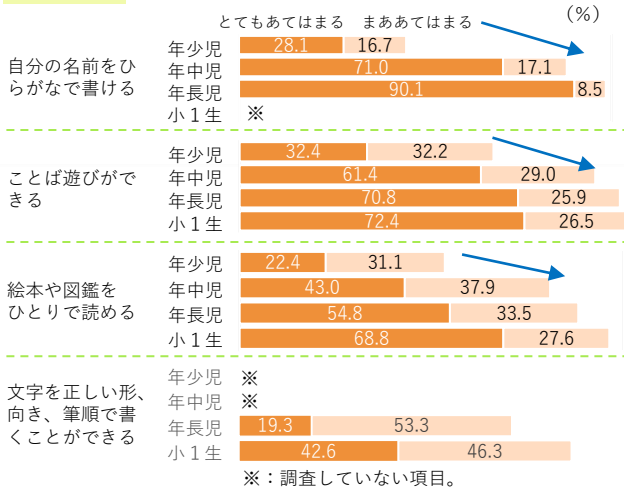


図1-2-2 数

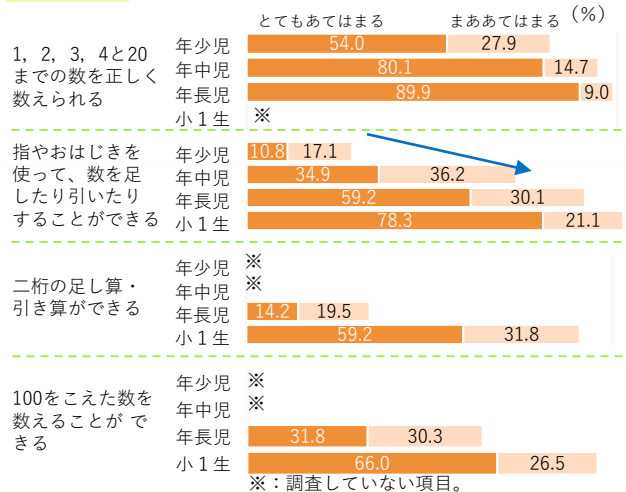


図1-2-3 論理性

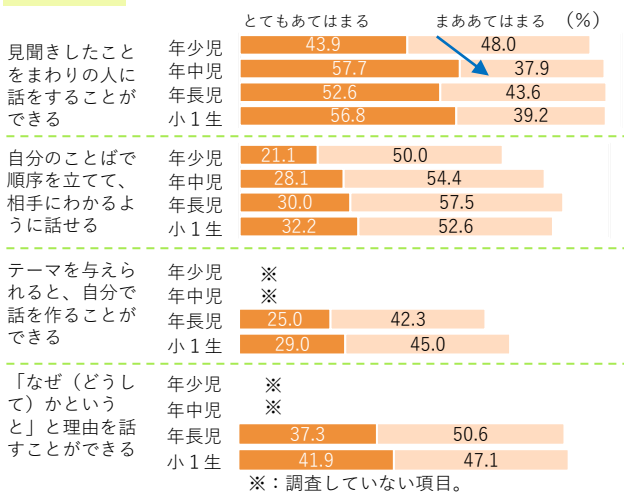


図1-2-4 分類する力

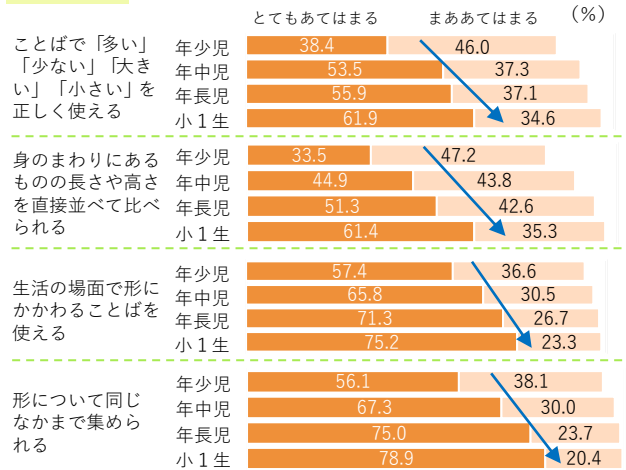
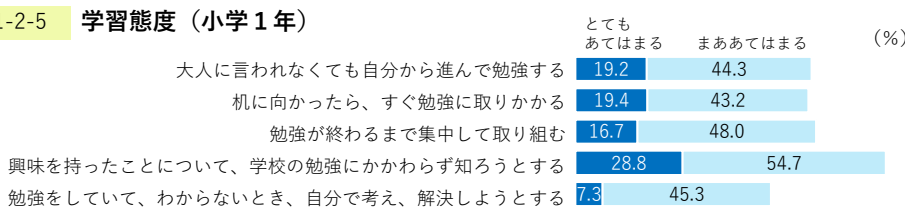


図1-2-5 学習態度 (小学1年)



- ・「言葉スキル」「数」は、年少児から小学1年にかけて大きく増加しており、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計して小学1年でほぼすべての項目が8割を超えている。一方、「自分のことばで順序を立てて、相手にわかるように話せる」といった「論理性」は、ゆるやかに増加する(図1-2-3)。「分類する力」は、年少児から小学1年まで、比率は徐々に増加する。例えば「形について同じなかまで集められる」では「とてもあてはまる」比率が年少児では56.1%だったが、小学1年では78.9%だった(図1-2-4)。
- ・小学1年の《学習態度》では、いずれの項目も「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計して比率が半数を超えている。「とてもあてはまる」では、「興味を持ったことについて、学校の勉強にかかわらず知ろうとする」は、28.8%であった(図1-2-5)。

年少児～小学1年の発達プロセス

生活習慣、学びに向かう力、認知の発達には順序性がある

年少児から小学1年までの発達プロセス

図1-3-1

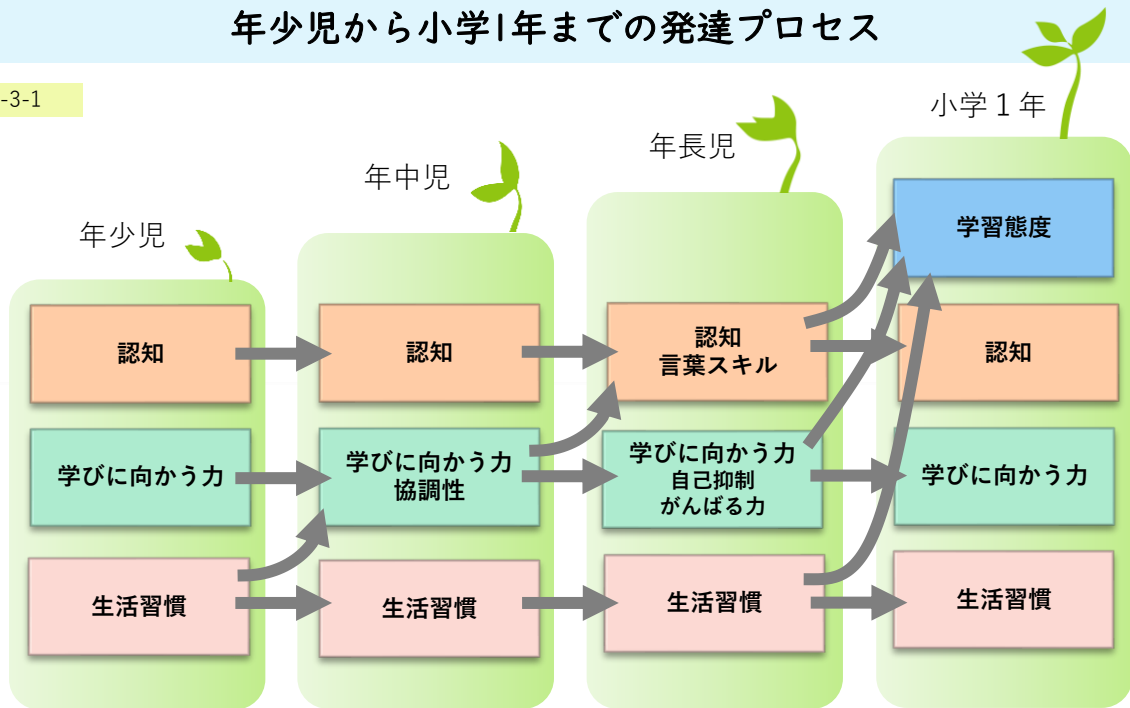
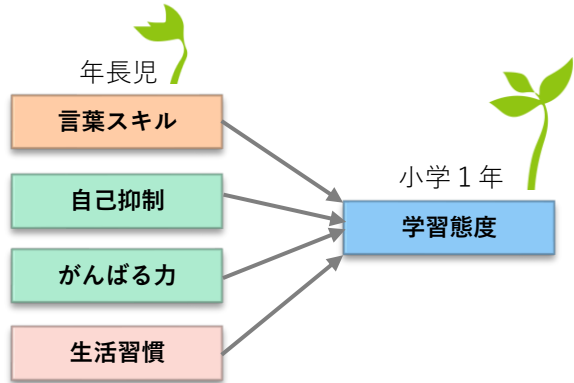
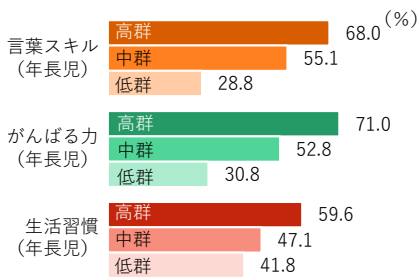


図1-3-1は、年少児から小学1年の縦断データをもとに、前の学年の力が次の学年にどのように影響しているかをみたものである。《生活習慣》《学びに向かう力》《認知》は、それぞれ前の学年の力が次の学年の力につながっている。また、年少児の《生活習慣》が年中児の《学びに向かう力（協調性）》につながり、年中児の《学びに向かう力》が年長児の《認知（言葉スキル）》に関係する。さらに、年長児の《生活習慣》《学びに向かう力》《認知》は、小学1年の《学習態度》を支えている。

年長児の発達と小学1年の学習態度

図1-3-2

勉強をしていて、わからないとき、自分で考え、解決しようとする（小学1年）



※「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計。  
 ※ 言葉スキル6項目、がんばる力4項目、生活習慣7項目について、「とてもあてはまる」4点、「まああてはまる」3点、「あまりあてはまらない」2点、「ぜんぜんあてはまらない」1点として算出。すべて回答した人のみ分析した。

図1-3-2は、年長児の「言葉スキル」「がんばる力」「生活習慣」をそれぞれ3群に分け、小学1年の《学習態度》との関連をみたものである。年長児の「言葉スキル」「がんばる力」「生活習慣」の高群のほうが、中・低群よりも、小学1年生の「勉強をしていて、わからないとき、自分で考え解決しようとする」比率が高い。学びの土台である《生活習慣》や「言葉スキル」「がんばる力」を幼児期に身につけることで、幼児期から小学校での学習への移行をスムーズに行えると考えられる（「自己抑制」も同様）。



年少児～小学1年の保護者のかかわり

# 保護者のかかわりは、年少から小1にかけてゆるやかに増加する

年少児から小学1年にかけての保護者のかかわりはどのように変化しているのだろうか。保護者の子どもの意欲を尊重する態度や子どもの思考を促すかかわりについて、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を表した。

**Q. 日頃、お子様との生活の中で、どれくらいしていますか。ふだんのお子様とのかかわりについて、どれくらいあてはまりますか。**

図1-4-1 意欲の尊重

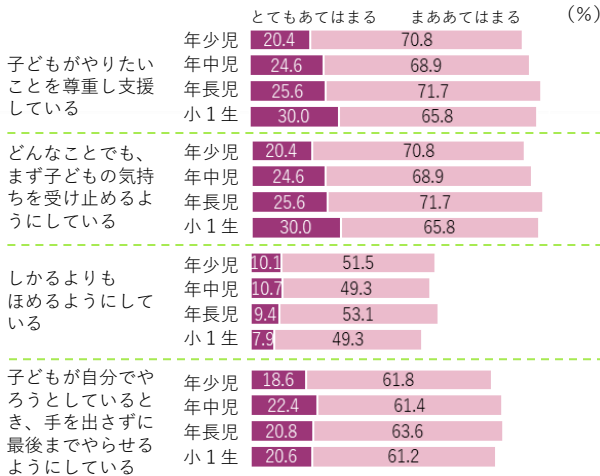
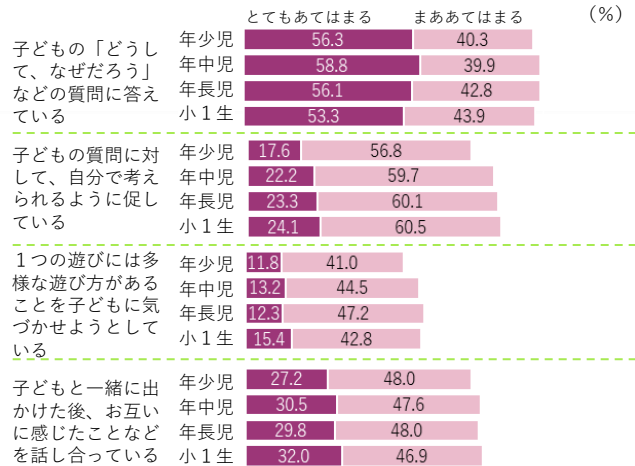


図1-4-2 思考の促し



年少児から小学1年にかけての「意欲の尊重」(図1-4-1)では、「子どもがやりたいことを尊重し支援している」「どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている」は、年齢とともにゆるやかに増加する。「しかるよりもほめるようにしている」は、年長児から小学1年にかけて、「とてもあてはまる」の比率が減少する。「思考の促し」(図1-4-2)では、年少児から年中児にかけて増加する傾向がみられる。「子どもの『どうして、なぜだろう』などの質問に答えている」では、年中児から小学1年にかけて減少するが、その他の項目については大きな変化はみられない。

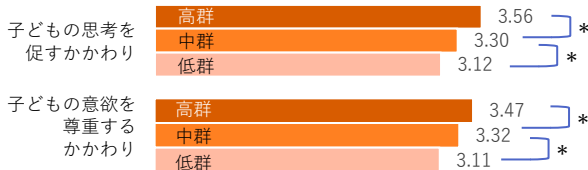
## 保護者のかかわりと子どもの発達

図1-4-3

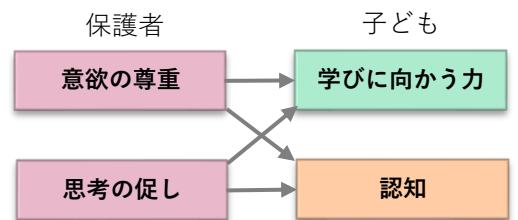
子どものがんばる力 (年長児)



子どもの言葉スキル (年長児)



※ がんばる力得点は4項目、言葉スキル得点は6項目について、「とてもあてはまる」4点～「ぜんぜんあてはまらない」1点としてその平均点を算出した。なお、最小値は1、最大値は4である。すべて回答した人のみを分析。



年長児期の保護者の「意欲の尊重」「思考の促し」を3群に分け、子どもの「がんばる力」と「言葉スキル」の得点を見た(図1-4-3)。保護者による「子どもの意欲を尊重する」比率が高い群ほど、子どもの「がんばる力」得点が高い傾向がみられた。同様に、保護者による「子どもの思考を促す」「意欲を尊重する」比率が高い群ほど、子どもの「言葉スキル」得点が高かった。保護者による「意欲の尊重」「思考の促し」といったかかわりが、子どもの「がんばる力」(学びに向かう力)や「言葉スキル」(認知)を支えていた。

小学2年～5年の学びに向かう力の発達

好奇心と自己主張は減少し、自己抑制は増加する

第2章では、小学2年から5年を通して回答した385名について分析している（保護者回答）。子どもの学びに向かう力は、小学2年から5年の4年間にどう変化しただろうか。「好奇心」「自己主張」「協調性」「自己抑制」「がんばる力」の5つについて、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を表した。

Q. 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図2-1-1 好奇心

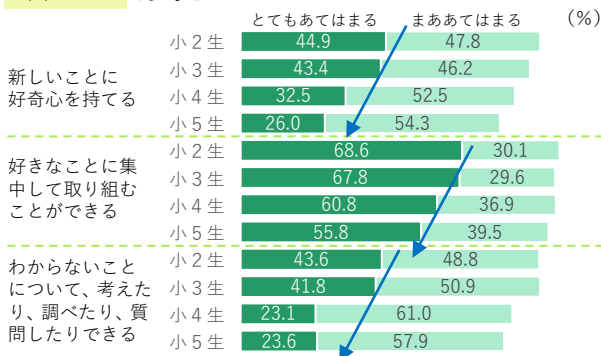


図2-1-2 自己主張

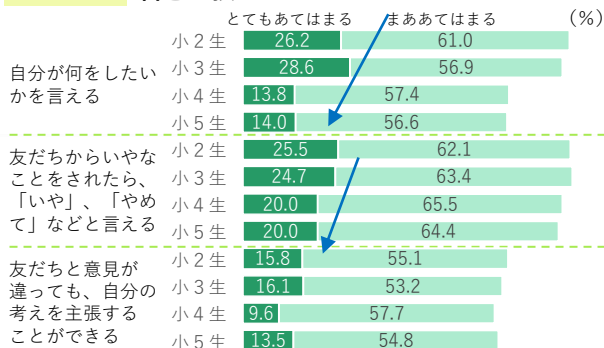


図2-1-3 協調性

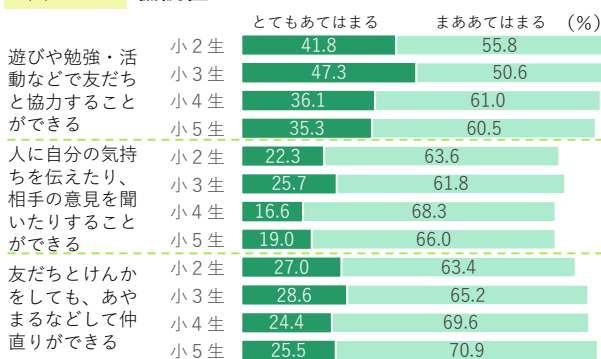


図2-1-4 自己抑制

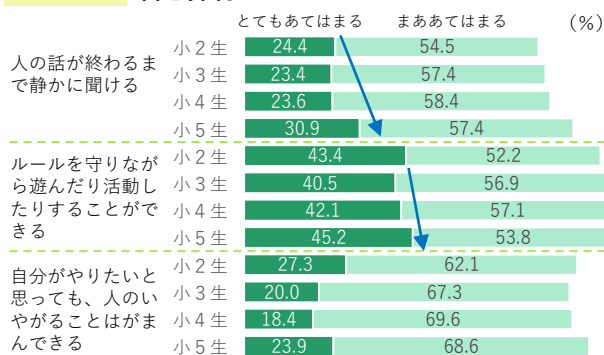
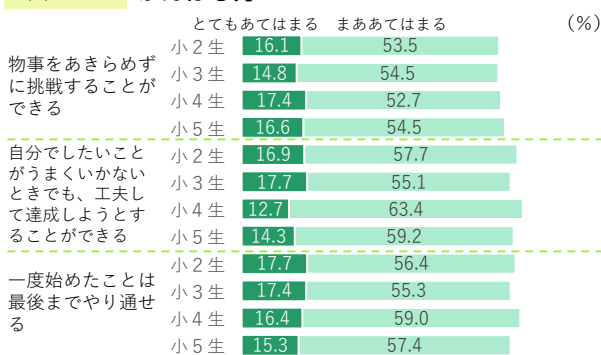


図2-1-5 がんばる力



- 「好奇心」は小学3年から小学5年で減少した。例えば、「好きなことに集中して取り組むことができる」では、「とてもあてはまる」比率が小学3年では67.8%だったが、小学5年では55.8%だった（図2-1-1）。同様に、「自己主張」も小学3年から小学5年で減少傾向がみられ、「自分が何をしたいかを言える」では、「とてもあてはまる」比率が小学3年では28.6%だったが、小学5年では14.0%だった（図2-1-2）。また、「協調性」は小学3年から小学4年にかけて、「とてもあてはまる」比率が減少した（図2-1-3）。
- 一方「自己抑制」は小学3年から小学5年にかけて増加した。例えば、「人の話が終わるまで静かに聞ける」では、「とてもあてはまる」比率が小学3年では23.4%だったが、小学5年では30.9%だった（図2-1-4）。「がんばる力」は変化があまりみられなかった（図2-1-5）。

## 小学2年～5年の認知の発達

言葉スキルと論理性は、  
小学3年から小学4年で減少する

子どもの認知は、小学2年から小学5年の4年間にどう変化しただろうか。「言葉スキル」と「論理性」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を表した。あわせて、「学習態度」と《教科の自信》の変化もみた。

Q. 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図2-2-1 言葉スキル

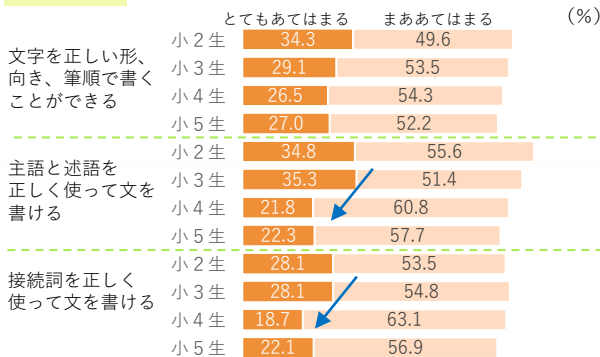
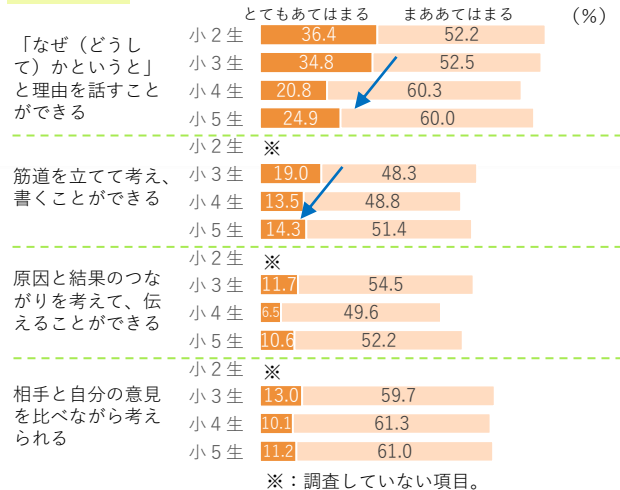
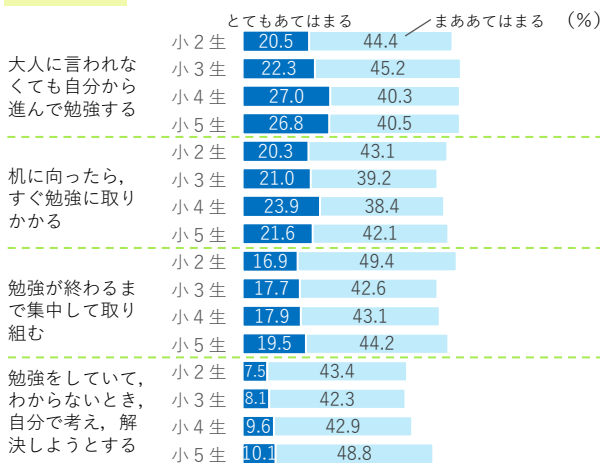


図2-2-2 論理性



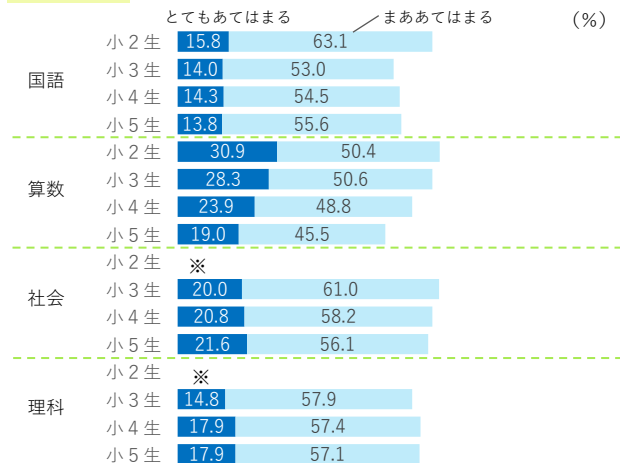
Q. お子様は以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図2-2-3 学習態度



Q. お子様は以下の教科にどれくらい自信を持っていますか。

図2-2-4 教科の自信



- 「言葉スキル」は小学3年から小学4年で比率が減少した。例えば、「主語と述語を正しく使って文を書ける」では、「とてもあてはまる」比率が小学3年では35.3%だったが、小学4年では21.8%だった(図2-2-1)。同様に、「論理性」も小学3年から4年で比率が減少し、「『なぜ(どうして)か』と理由を話すことができる」では、「とてもあてはまる」が小学3年では34.8%だったが、小学4年では20.8%だった。小学校低学年から高学年になると、学習内容が知識の習得から物事の関係性を把握し表現するなど、複雑で難解なものになる中で、保護者の子どもに対する評価基準が高くなったことも考えられる(図2-2-2)。
- 学習態度は、小学2年から小学5年まで大きな変化はなく、「とてもあてはまる」と回答したのは2割程度で、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせて6割前後だった(図2-2-3)。
- 「教科の自信」は、国語が小学2年から小学3年にかけてやや減少し、算数は学年が上がるにつれて減少した(図2-2-4)。

小学2年～5年の保護者のかかわり ①

保護者のかかわりは、  
小学校低学年から高学年にかけて減少する

子どもが発達するとき、保護者のかかわりはどのように変化していくだろうか。「思考の促し」「教科への興味の刺激」「学習習慣の形成」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を表した。

Q. 日頃、お子様との生活の中で、どれくらいしていますか。  
ふだんのお子様とのかかわりについて、どれくらいあてはまりますか。

図2-3-1 思考の促し

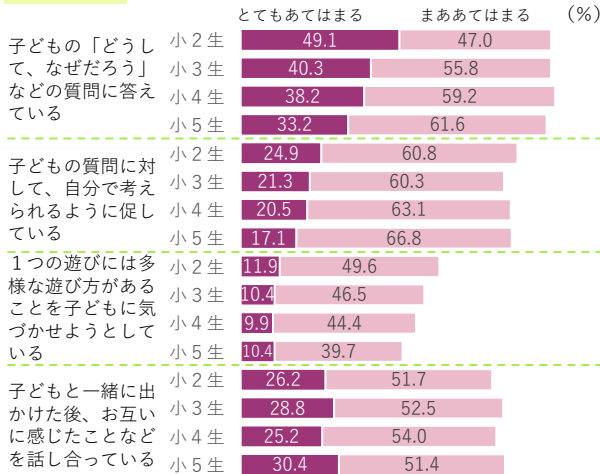


図2-3-2 教科への興味の刺激

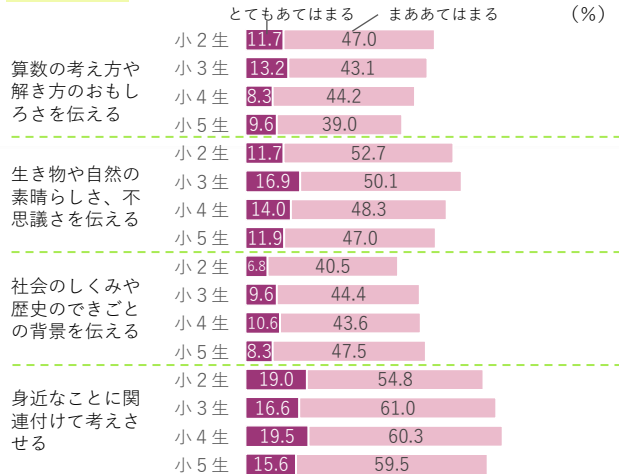
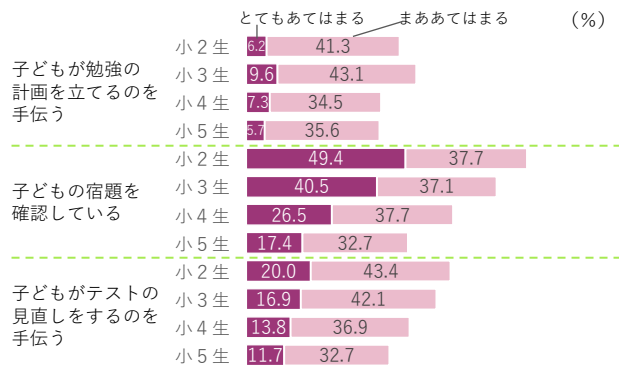
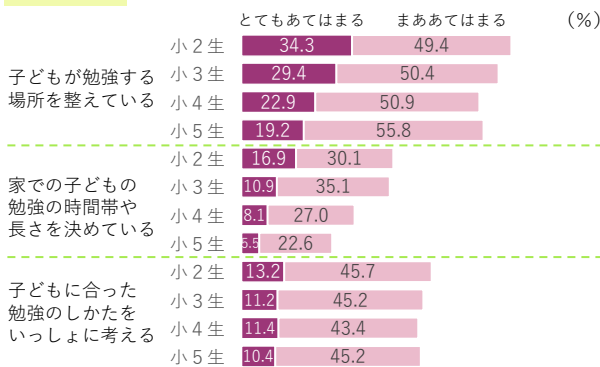


図2-3-3 学習習慣の形成



- 「思考の促し」は学年が上がるにつれて減少した。例えば、「子どもの質問に対して、自分で考えられるように促している」では、「とてもあてはまる」比率が小学2年では24.9%だったが、小学5年では17.1%だった(図2-3-1)。学校生活が始まる小学生の時期から質問項目に加えた「教科への興味の刺激」「学習習慣の形成」も同様に、学年が上がるにつれて減少する傾向がみられた(図2-3-2～3)。
- 今回の結果は、小学2年から小学5年の発達に合わせて、保護者が子どもへのかかわりを徐々に変化させていると考えられる。直接的な手助けは減少するが、子どもの状況を知った上で必要な局面で手を差し伸べることは保護者子の日常的なかかわりがあってこそ可能といえよう。

## 小学2年～5年の保護者のかかわり②

保護者の教科への興味の刺激が  
子どもの学びに向かう力と認知に関連する

小学2年から小学5年にかけて、保護者子は互いにどのように作用しているだろうか。子どもの学びに向かう力と認知を得点化し、その平均値を、同じ時期の保護者のかかわりの高群・低群別に比較した。

\*：明らかな差がみられた。

図2-4-1 子どもの好奇心得点  
(保護者の教科への興味の刺激2群別)

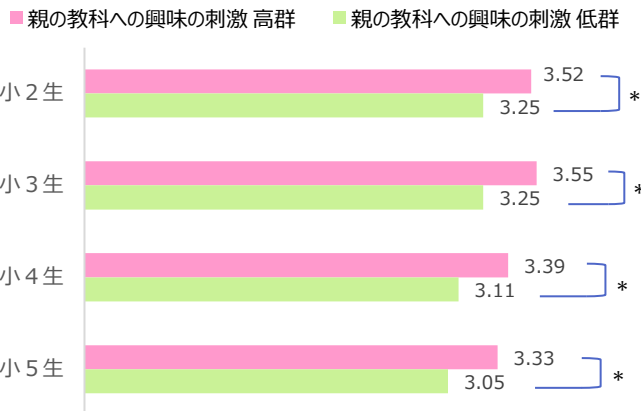


図2-4-2 子どものがんばる力得点  
(保護者の教科への興味の刺激2群別)

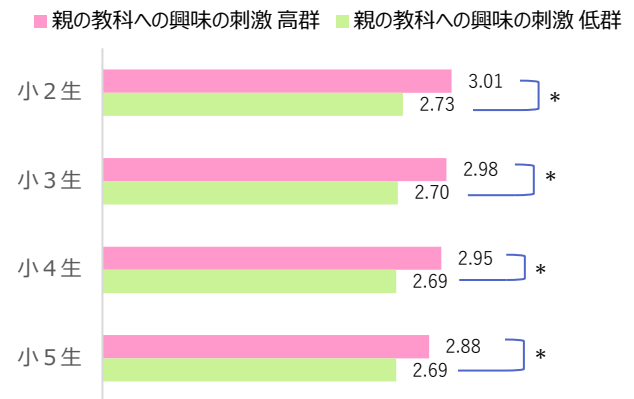


図2-4-3 子どもの言葉スキル得点  
(保護者の教科への興味の刺激2群別)

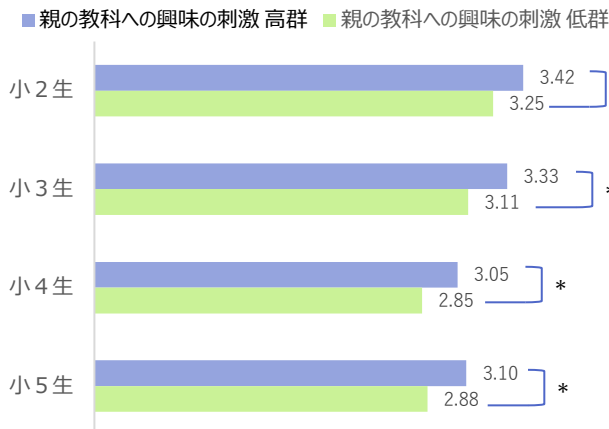
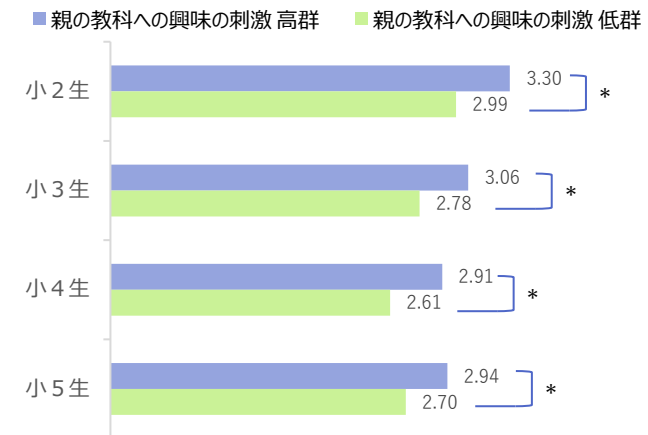


図2-4-4 子どもの論理性得点  
(保護者の教科への興味の刺激2群別)



※ 子どもの好奇心5項目(小学2年のみ6項目)、がんばる力は小学2年・小学3年で4項目、小学4年・小学5年で7項目、言葉スキル5項目(小学3年のみ4項目)、論理性は小学2年で5項目、小学3年・小学4年で10項目、小学5年で9項目について「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」3点、「あまりあてはまらない」2点、「ぜんぜんあてはまらない」1点として、その平均点を算出。なお、最小値は1、最大値は4である。すべて回答した人のみ分析した。

※ 「保護者の教科への興味の刺激」2群は5項目の平均点を算出し、高群と低群に2区分した。項目は、「生き物や自然の素晴らしさ、不思議さを伝える」「算数の考え方や解き方のおもしろさを伝える」「社会のしくみや歴史のできごとの背景を伝える」「問題を解くときに図や表を描かせる」「身近なことに関連付けて考えさせる」の5項目。

- 図2-4-1～2は子どもの学びに向かう力、図2-4-3～4は認知について、保護者の教科への興味の刺激2群の高群と低群ごとに平均値を比べたものである。小学2年から小学5年を通して、保護者の教科への興味の刺激が高い群のほうが、低い群に比べて平均値が有意に高かった。
- 小学2年から5年は小学校の低学年から高学年に移行し、思考が広がり深まり発達していく時期である。学習内容のおもしろさを伝えたり身近なことに関連付けたりして、子ども自身が学んでいることの楽しさや魅力、生活とのつながりに気づくのを支えることが大切であると示している。

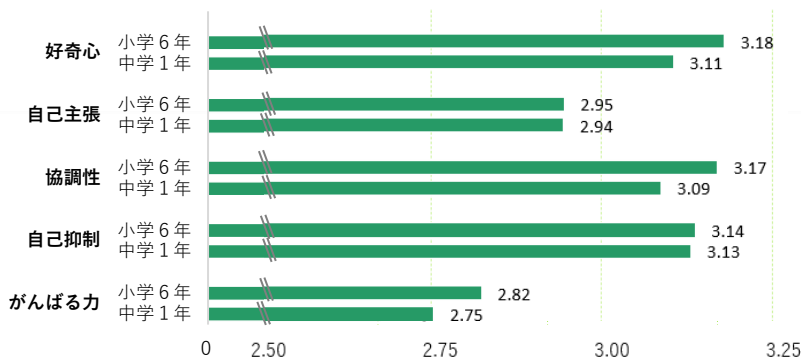
小学6年～中学1年の学びに向かう力の発達

好奇心、協調性、がんばる力はやや減少し、  
学習態度はほとんど変化していない

第3章では、小学6年から中学1年を通して回答した307名について分析している（保護者回答）。小中接続期に、《学びに向かう力》はどれくらい成長しているか。「好奇心」「自己主張」「協調性」「自己抑制」「がんばる力」に注目して、変化をみてみよう。

Q. 現在、お子様は生活の中で、以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図3-1-1 小中接続期の《学びに向かう力》の変化

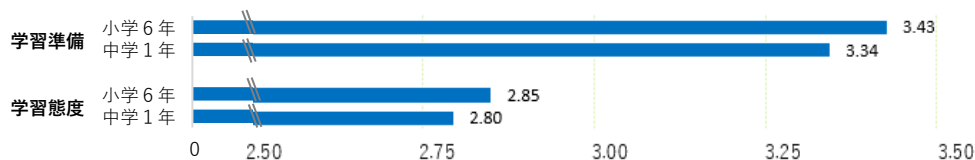


※ 《学びに向かう力》に関しては、確認的因子分析の結果に基づき、「好奇心」、「自己主張」、「協調性」、「自己抑制」、「がんばる力」の各質問項目の値を足し合わせ、平均点を算出している。なお、最小値は1、最大値は4である。すべて回答した人のみを分析。

小学6年から中学1年に学年が上がっても、《学びに向かう力》はほとんど変化がない（「自己主張」「自己抑制」）か、やや減少（「好奇心」「協調性」「がんばる力」）している。「好奇心」に関しては、小学4年から中学1年まで段階的に減少している（小学4年、小学5年の図は省略）。本調査は、小学6年の調査時に新型コロナウイルス感染症の拡大による学校の休校措置や社会状況の変化があった。「協調性」「がんばる力」の減少は、コロナ禍の学習環境の変化が影響している可能性がある。コロナ禍のさまざまな制約のなかで、「物事をあきらめずに挑戦すること」「初めてのことで何事にも積極的に取り組むこと」といった挑戦の機会がそもそも減少した。また、友だちと遊び・勉強・活動する機会が減ったことにより、協調性も育ちにくい状況にあった。他方で、学校段階が小学校から中学校に移行するのに伴い、保護者が子どもをみる評価基準が高くなり、「あまり成長していない」と回答したことも考えられる。

Q. 現在、お子様は以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図3-1-2 小中接続期の学習態度の変化



※ 学習態度に関しては、確認的因子分析の結果に基づき、学習準備、学習態度の各質問項目の値を足し合わせ、平均点を算出している。なお、最小値は1、最大値は4である。すべて回答した人のみを分析。

- 「学習準備」の得点（「学校から出された宿題をやる」「自分で翌日の学校の準備をする」「学校からの連絡物を家族に渡す」「家で学校の出来事について話す」）は、小学6年から中学1年にかけてやや減少している。
- 「学習態度」の得点（\*）は、小学6年から中学1年にかけての変化が小さい。
  - \* 「学習態度」の項目は、両学年に共通する質問項目として「大人に言われなくても自分から進んで勉強する」「机に向かったら、すぐ勉強に取りかかる」「勉強が終わるまで集中して取り組む」である。さらに小学6年は「勉強をしていて、わからないとき、自分で考え、解決しようとする」、中学1年は「興味を持ったことについて、学校の勉強にかかわらず知ろうとする」が加わっている。

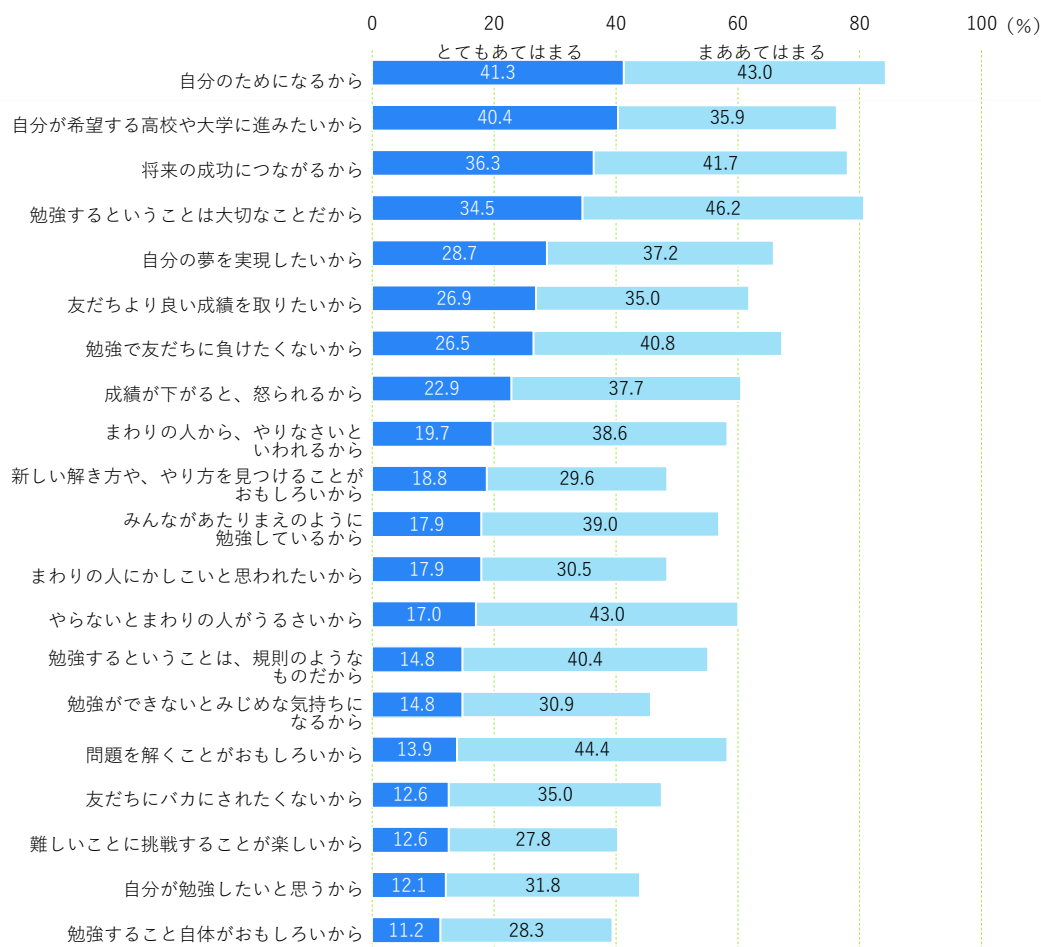
## 中学1年の学習動機

## 学ぶ動機は「自分のためになるから」、 「希望する高校や大学に進みたいから」

本調査では、小学4年以降、子どもへの調査も行っている。中学1年は、学習についてどのような考えや気持ちを持っているだろうか。学習する動機についてたずねた。

Q. 以下の項目は、あなたが学習する理由にどれくらいあてはまりますか。

図3-2-1 学習動機（子ども回答）



※「とてもあてはまる」の値の降順に表示。

※ 西村・河村・櫻井（2011）「自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス」より引用

学習動機について、「とてもあてはまる」の比率をみると、「自分のためになるから」「自分が希望する高校や大学に進みたいから」「将来の成功につながるから」「勉強するということは大切なことだから」「自分の夢を実現したいから」に多く、学びに自分にとっての価値や重要性を見出し、積極的に取り組む動機が3割弱～4割となっている。次いで「友だちより良い成績を取りたいから」「勉強で友だちに負けたくないから」が続き、友だちとの比較などを意識した項目が26%強である。「成績が下がると怒られるから」「まわりの人から、やりなさいといわれるから」は、周囲からの働きかけによって学習に取り組む学習動機で2割前後を占める。「新しい解き方や、やり方を見つけることがおもしろいから」といった、興味や楽しさに基づいて、学習に自発的に取り組む項目は2割以下であった。

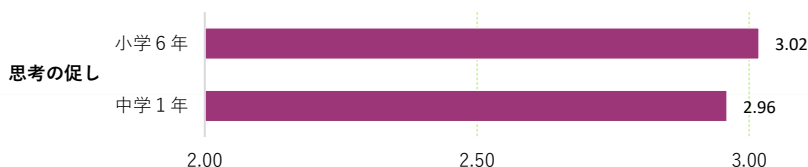
小学6年～中学1年の発達と保護者のかかわり

勉強の計画立てやテストの見直しなどの  
保護者のかかわりは増加する

小学6年から中学1年への移行期に保護者のかかわりはどのように変化しているか。子どもが考えられるように保護者が促す「思考の促し」と、保護者が子どもの勉強の計画やテストの準備などを手助けする「学習習慣の形成」、保護者が子どもの各教科への興味関心を高める「教科への興味の刺激」に注目してみよう。

Q. 日頃、お子様との生活の中で、あなたは以下のことについて、どれくらいしていますか。

図3-3-1 小中接続期の保護者のかかわりの変化

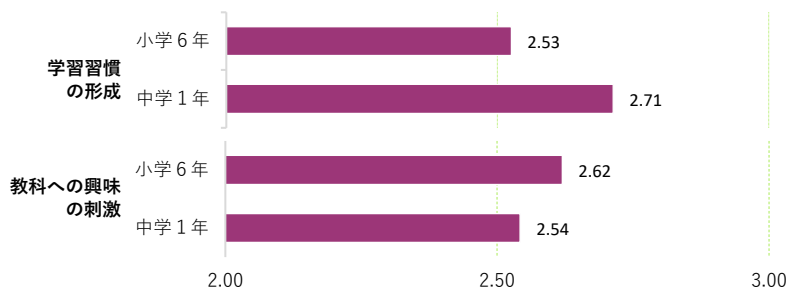


※ 「思考の促し」に関しては、「子どもの『どうして、なぜだろう』などの質問に答えている」「子どもの質問に対して、自分で考えられるようにうながしている」「子どもと一緒に出かけたあと、互いに感じたことなどを話し合っている」の各質問項目の値を足し合わせ、平均点を算出している。なお、最小値は1、最大値は4である。すべて回答した人のみを分析。

小学6年から中学1年にかけて、保護者が子どもに対して行う「思考の促し」はやや減少している。子どもが中学生となり、保護者と子のコミュニケーションのあり方に変化があり、幼児期から小学生期にみられた子どもの「どうして、なぜだろう」などの質問、お出かけの後の感想の伝え合いなどの「思考の促し」の機会が段階的に減少している。

Q. 現在、あなたは次のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図3-3-2 小中接続期の保護者の学習へのかかわりの変化



※ 「学習習慣の形成」は、「子どもが勉強の計画を立てるのを手伝う」「子どもがテストの見直しをするのを手伝う」「子どもに合った勉強のしかたを一緒に考える」「授業の復習をきちんとさせている」「テストには、計画的に準備してのぞむようにさせている」、「教科への興味の刺激」は、「生き物や自然の素晴らしさ、不思議さを伝える」「算数の考え方や解き方のおもしろさを伝える」「社会のしくみや歴史の出来事の背景を伝える」「問題を解くときに図や表を描かせる」「身近なことに関連付けて考えさせる」の各質問項目の値を足し合わせ、平均点を算出している。なお、最小値は1、最大値は4である。すべて回答した人のみを分析。

※ 小学6年～中学1年データでの因子分析に基づいた結果を示しているため、小学2年～5年の保護者のかかわりの内容と異なっている(P13)。

- 保護者が「学習習慣の形成」を行うかかわりは、小学6年から中学1年で増加している。子どもが中学生になり、より具体的に勉強の計画を立てるのを手伝ったり、勉強のしかたを一緒に考えたり、テストの準備・テストの見直し・授業の復習などの中学生に見合ったかかわりをしていることがわかる。中学生になり、中間テスト、期末テスト、高校進学を見据えた成績評価などを意識して、保護者が子どもにかかわっているといえる。また、コロナ禍で自宅での学習が増えた影響もあるかもしれない。
- 他方で、「教科への興味の刺激」は、小学6年から中学1年にかけてやや減少している。身近なことから教科内容への興味を高めることができる小学生段階と異なり、抽象的な内容が増える中学生段階の特徴が徐々にあらわれているのかもしれない。



## 中学1年までに身に付けておいたほうがよかったこと

# 時間の使い方や勉強の目標・計画を立てることが上位に上がっている

中学1年の2、3月の時点で、保護者と子どもの両方に、「中学校に入学するまでに身に付けておいたほうがよかったと思うこと」を16項目のうちから5つ選んでもらった（子どもは「その他」を加えた17項目）。

Q. 中学までに身に付けておいたほうがよかったことは何ですか（5つまで）。

図3-4-1 中学までに身に付けておいたほうがよかったと思うこと（上位5つまで）

(%)

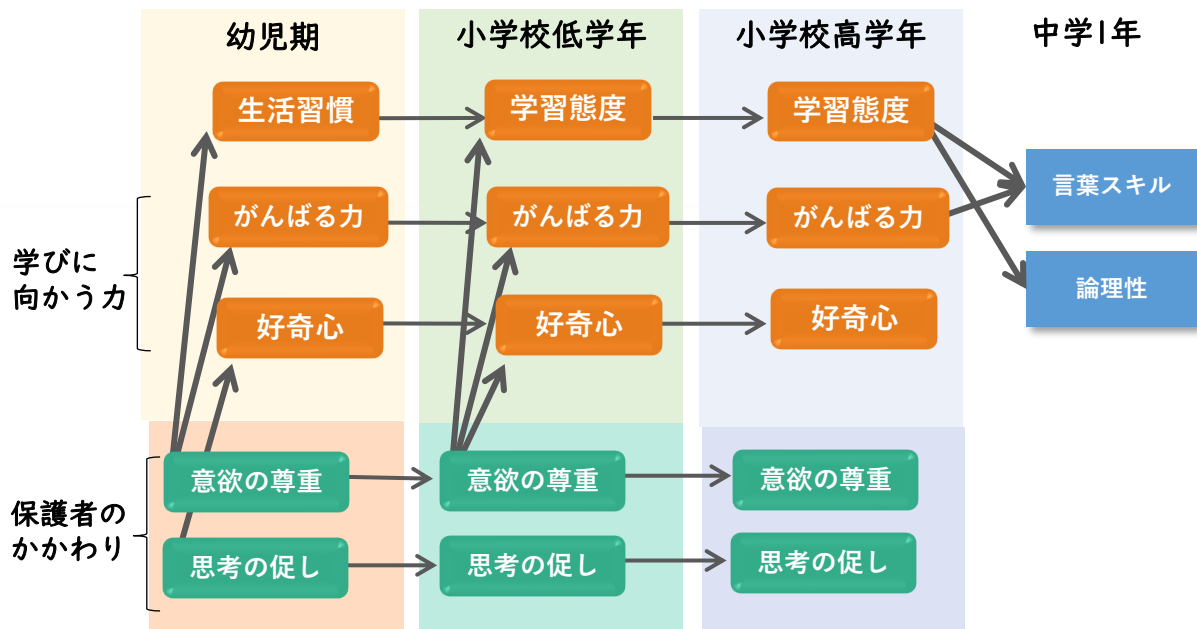
保護者		子ども			
①	自分で時間の使い方を考えて調整できること	55.7	①	目標や計画を立てて勉強すること	57.0
②	目標や計画を立てて勉強をすること	54.3	②	自分で時間の使い方を考えて調整できること	49.8
③	自分で間違えたところを確認し、復習すること	42.5	③	自分で間違えたところを確認し、復習すること	46.2
④	困難なことがあっても、発想を転換して考えること	39.7	④	勉強のやり方をわかっていること	35.4
⑤	勉強することは楽しいという気持ちを持つこと	33.3	⑤	友人と良好な関係を築けること	31.8
★	勉強のやり方をわかっていること	32.4		身だしなみを整えること	26.5
	物事をあきらめずに、挑戦できること	31.1		物事をあきらめずに、挑戦できること	25.6
	周囲に自分の意見や考えを伝えられること	28.8	★	勉強することは楽しいという気持ちを持つこと	22.0
	身のまわりだけでなく、社会の動きに関心をもつこと	28.8		小学校範囲の文章読解、算数の考え方や解き方を習得しておくこと	21.5
★	友人と良好な関係を築けること	26.5		周囲に自分の意見や考えを伝えられること	19.3
	やるべきことや周囲のことを考えて、自分の気持ちを整理できること	22.8		新しいアイデアや発想を生み出せること	17.9
	新しいアイデアや発想を生み出せること	21.9		小学校範囲の漢字、計算を習得しておくこと	17.0
	身だしなみを整えること	21.0		やるべきことや周囲のことを考えて、自分の気持ちを整理できること	16.6
	小学校範囲の文章読解、算数の考え方や解き方を習得しておくこと	19.6	★	困難なことがあっても、発想を転換して考えること	14.8
	小学校範囲の漢字、計算を習得しておくこと	16.9		小学校範囲の理科や社会の内容や考え方を習得しておくこと	14.3
	小学校範囲の理科や社会の内容や考え方を習得しておくこと	8.2		身のまわりだけでなく、社会の動きに関心をもつこと	11.7
				その他	4.5

※ ★は他方の①~⑤位に入っている項目。  
※ 保護者子どもとも回答のあった223名を分析。

- 保護者子どもに多い項目は、「自分で時間の使い方を考えて調整できること」「目標や計画を立てて勉強すること」「自分で間違えたところを確認し、復習すること」であった。保護者子どもに、時間の使い方や目標・計画を立てて勉強すること、間違えたところの復習の重要性を感じていることがうかがわれる。
- また、保護者では「困難なことがあっても、発想を転換して考えること」「勉強することは楽しいという気持ちを持つこと」が5位以内に入り、中学校生活を送る上で、困難さへの対応や勉強に対する気持ちの持ち方などを重視していることがうかがわれる。
- 子どもでは、「勉強のやり方をわかっていること」「友人と良好な関係を築けること」が5位以内に入った。友人との良好な関係は、中学校生活を送る上で身に付けておくべきことであると捉えている。

## 保護者による子どもの意欲の尊重や思考を促すかわりは 幼児期～小学校低学年の子どもの発達を支えている

図4-1-1 同時期の影響について



※ 中学1年調査での子どもの回答数に合わせて、分析データは223名分としている。  
 ※ 図中の観測変数及び潜在変数は、子どもの月齢、性別、母保護者の学歴による影響を統制している。

### 分析で用いた項目

**子ども** 生活習慣・学習態度  
 学びに向かう力：小学生以降の発達に影響があるといわれる「好奇心」「がんばる力」  
 認知：「言葉スキル」「論理性」  
 ※ 中学1年時の認知のみ、子ども自身の回答。

**保護者** 養育態度：「意欲の尊重」  
 働きかけ：「思考の促し」

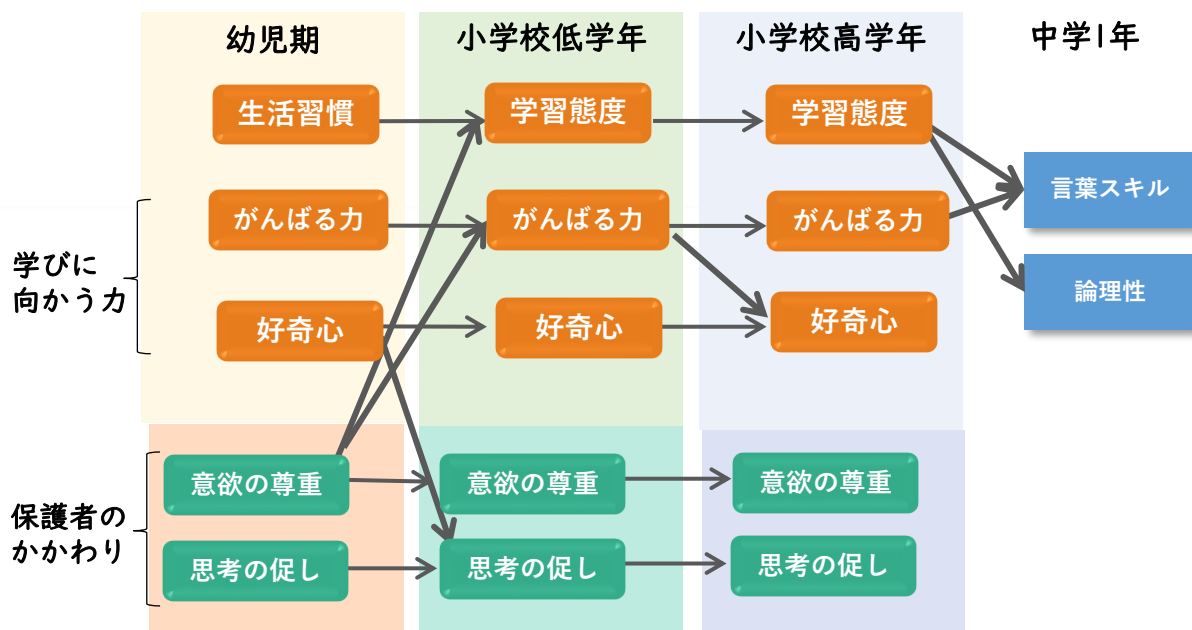
この分析では、幼児期から小学校高学年にかけての子どもの「生活習慣・学習態度」「好奇心」「がんばる力」がどのように育っていくか、また、それらが中学1年の「言葉スキル」「論理性」に与える影響について検証した。また併せて、幼児期、小学校低学年、高学年の各時期における保護者の養育態度や働きかけが、子どもの発達をどのように支えているかについても分析している。

その結果、幼児期と小学校低学年では、保護者が「子どもの意欲を尊重したり（意欲の尊重）」、「自ら考えるように思考を促したり（思考の促し）」することが、子どもの「生活習慣・学習態度」や「好奇心」、「がんばる力」といったスキルを支えていた。一方、小学校高学年での保護者のかかわりは、こうした子どものスキルに関連していなかった。

このことから、幼児期から小学校低学年においては、保護者の養育態度や働きかけが、子どもの「今」の発達を支えていると言えるだろう。

## 幼児期の意欲を尊重する態度が 小学校低学年での学習態度やがんばる力の 成長につながる

図4-2-1 次の時期の影響について



※ 中学1年調査での子どもの回答数に合わせて、分析データは223名分としている。

※ 図中の観測変数及び潜在変数は、子どもの月齢、性別、母保護者の学歴による影響を統制している。

### 分析で用いた項目

**子ども** 生活習慣・学習態度  
学びに向かう力：小学生以降の発達に影響があるといわれる「好奇心」「がんばる力」  
認知：「言葉スキル」「論理性」  
※ 中学1年時の認知のみ、子ども自身の回答。

**保護者** 養育態度：「意欲の尊重」  
働きかけ：「思考の促し」

この分析では、幼児期の保護者のかかわりが、小学校低学年の時期の子どもの発達に影響を及ぼしているか、同様に、小学校低学年の時期の保護者のかかわりが高学年の時期の子どもの発達に、小学校高学年の時期の保護者のかかわりが中学1年時の子どもの発達に影響を及ぼしているかを分析した。またそれぞれの時期における子どものスキルなどが保護者の養育態度にも影響しているかを検証した。

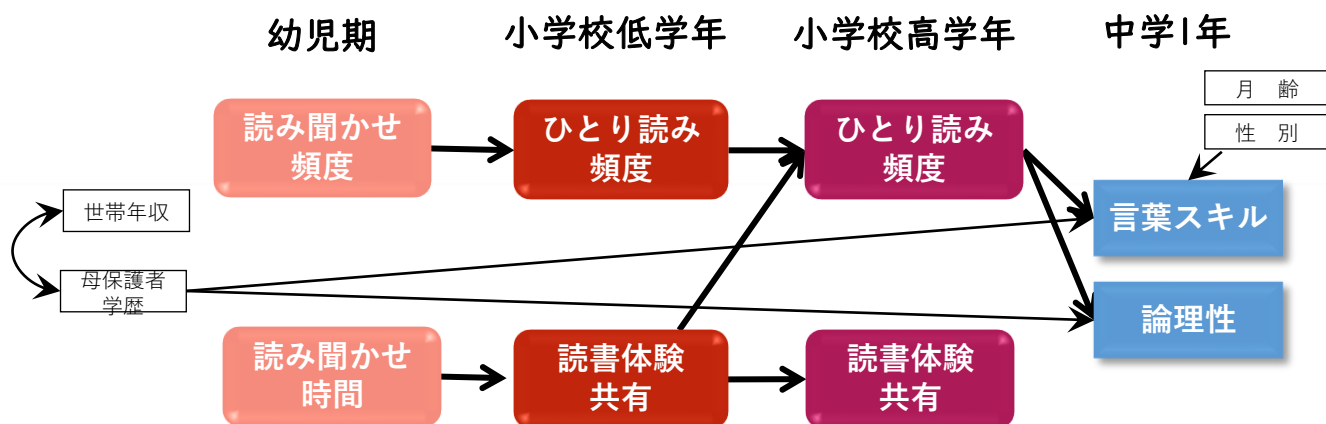
その結果、幼児期に、保護者が「子どもの意欲を尊重する（意欲の尊重）」かかわりが、小学校低学年での子どもの「学習への前向きな態度（学習態度）」や、「がんばる力」の成長に結びついていた。低学年の学習態度や「がんばる力」は、小学校高学年の時期での成長にも影響を及ぼし、さらには、中学1年時での「言葉スキル」と「論理性」の発達へとつながっていた。

このことから、幼児期における保護者のかかわりは、小学校低学年という少し先の子どもの学習態度やがんばる力を伸ばしており、これは、いわば“幼児期の保護者子の思い出”が、その先の小学校低学年での子どもの成長を支えているとも表現できるだろう。

また、幼児期において、「好奇心」の強い子どもに対しては、小学校低学年での「子どもに自ら考えることを促す（思考の促し）」かかわりが多くなる傾向がみられた。このように保護者のかかわりが子どもの発達に影響を及ぼすだけでなく、子どものスキルが保護者のポジティブなかかわりを引き出す面もあることが確認された。

## 幼児期の保護者子の読み聞かせが、小学生でのひとり読みにつながり、さらに中学生での言葉スキルや論理性の成長を支える

図4-2-1 読み聞かせ



### 分析で用いた項目

**読み聞かせ頻度**：「ほとんど毎日」「週に3～4日」「週に1～2日」「月に1～3日以下」「ほとんどない」

**読み聞かせ時間**：先週1週間の中での1日の平均時間

**ひとり読み頻度**：「ほとんど毎日」「週に3～4日」「週に1～2日」「月に1～3日以下」「ほとんどない」

**読書体験共有**：内容について質問したり、子どもの質問に答えたりするという双方向のやり取り

この分析では、幼児期の保護者子での読み聞かせの頻度が、小学生の時期に子どもがひとりで絵本や本を読む（見る）頻度に影響を及ぼしているか、さらにそれが、中学1年時の子どもの「言葉スキル」や「論理性」といった言語発達に影響を及ぼしているか検証した。

その結果、幼児期での保護者子の読み聞かせの頻度が高いほど、小学校低学年の時期の子どもの「ひとり読み」の頻度が高くなることがわかった。そして、さらにそれが小学校高学年での「ひとり読み」の頻度の高さを支えており、中学1年時での「言葉スキル」や「論理性」の獲得に影響していた。

また、幼児期の保護者子の読み聞かせ時間が、小学校の時期に保護者子で読書体験を共有している時間に影響を及ぼしているか、それが中学1年時の子どもの言語発達に影響を及ぼしているかをみた。

その結果、幼児期の読み聞かせで、内容について質問したり、子どもの質問に答えたりするという双方向のやり取りに時間をかけているほど、小学校低学年の時期に、保護者子で本の内容について話し合ったり、感想を述べ合ったりするという読書体験を共有することが多く、それが小学校高学年での子どものひとり読みの頻度につながっていた。

このように、幼児期の読み聞かせ活動は、小学校低学年の子どもがひとりで本を読む頻度にも影響しており、低学年で本を読む習慣を身につけた子どもは、高学年になってからも本を読む頻度が高かった。また、幼児期における保護者子の絵本の読み聞かせの活動が盛んなほど、小学校入学後も、本の内容について感想を話し合ったり、読書の楽しさを伝えたりするなど保護者子間での読書体験の共有が多く、子どものひとり読みにつながっていった。こうして児童期に培われた読書行動は、中学1年時での「言葉スキル」や「論理性」を支えているといえるだろう。

## 無藤 隆 (白梅学園大学名誉教授)



本調査は2012年つまり子どもが3歳児のときから開始し、2021年に中学1年になるまで毎年1回の調査を行ってきた。対象は保護者である。途中、幼児から小学生になる際にサンプルが半減し、その後も漸減しているため、分析したサンプルが当初の全体のサンプルと基本的な変数では違いがないことを確認している。また小学4年以降は子ども自身を対象とした調査を加えたが、その前は保護者から見たものを尋ねている。小学4年以降も保護者への質問は継続している。質問内容はその年齢に合わせて内容的な同一性を確保しつつ変更を加えてきた。その結果は年齢的な変化と共に時代的な変化が重なっているに違いない。特に2020年・2021年は新型コロナウイルス感染症の拡大が見られた時期であり、休校等もあり、注意が必要であろう。

分析は理論的なモデルを想定して行った。それは、保護者子の相互作用の影響関係は同時期で生じること、そして次の時期への影響関係は子どもの安定した特性（能力やスキルや習慣）を通して起こること、時期を飛び越えての影響関係を隣り合った時期での影響の継続として起こること、などである。また分析としては、同様の変数の間の隣接時期の相関は極めて高いため、それを統計的に除きまた主要な変数の相互関係を統制して、パス解析等で行った。また、性別、月齢、母保護者の学歴を全体として統制した。

主な結果として、母保護者の養育態度や働き掛け（意欲の尊重と思考の促し）が子どもの生活習慣・学習態度や好奇心、がんばる力を支えている。なお、小学校高学年ではそういう関連は見られなくなる。さらに、幼児期の保護者の意欲の尊重の関わりが小学校低学年の子どもの学習態度やがんばる力に結びついていた。また、小学校高学年での成長にも影響し、中学1年での言葉のスキルと論理性につながっていた。

ここから、第一に保護者の関わり（もとより子どもからの影響もあるとしても）、とりわけ意欲と思考への誘導が子どもの学ぶ力への育成に影響していくようである。特にそれは幼児期に見られることである。第二に小学校の学習や知的発達のある部分に対して幼児期の子どもの知的な成長が影響を与えるようである。特に、子どもの興味・関心を支え伸ばす保護者の関わりが小学校低学年での学びに向かう力に影響し、それがさらに高学年につながり、とくにそこでの学習態度とがんばる力が中学1年生の知的な力へとつながることが示唆されるのである。

## 秋田 喜代美 (学習院大学教授・東京大学名誉教授)



本調査は学術的にみると他研究にはない、3点の特徴がある。第1は3歳から中学1年まで同一の子どもを毎年追った調査であること、第2はその際に子どもの発達として認知や生活習慣だけではなく、学びに向かう力という非認知スキル等とも言われるこれからの社会に大事とされる資質を含む調査であること、第3に国際的に数多くの縦断調査がなされているが、保護者のかかわりにも焦点を当て毎年継続調査した調査は他国にもないこと、すなわち家庭環境や保護者の関わりの大切さを示した初の縦断調査である。

今回の報告の中でも私は次の3点に特に着目したい。第1着目点は、幼児期の読み聞かせ頻度が小学校低学年のひとり読みにつながり、さらに高学年以降の言葉スキルや論理性につながるという道筋を示す結果である。また大事なのは幼児期の読み聞かせ等には世帯年収は関連しないという事実である。言葉スキルや論理性はトレーニングですぐに身につくものではない。だからこそ、生涯の学び手育成のためにもこの研究知見が示すように、幼児期の読み聞かせや低学年のひとり読み読書を大事にしたい。

次に、年少児から小学1年への育ちにおいて、3歳児期の生活習慣が基盤となり、4歳児期の仲間との協働性のような学びに向かう力にもつながり、さらに自己抑制やがんばる力という学びに向かう力につながり、小学校以降の学習態度等につながるという知見である。文字数思考の教育だけではなく、幼児期に生活習慣や学びに向かう力の3本柱がバランスよく育つことが、学習態度や思考力育成にもつながる。

そして第3の着目点は、この発達の道筋において、幼児期における保護者の意欲の尊重と思考の促しが大事という知見である。学習への前向きな態度やがんばる力は幼児期から小学校低学年に育つこと、中高学年や中学校になっても学びに向かう力は大きく変化しないことも示された。だからこそ幼児期からが大事である。また小学校高学年や中学までの情報があるから、自ら目標や計画を立てることや学習や時間の使い方を考え調整できることを児童期に身につけておくことの大切さが保護者子両面の声としても挙がってきた。意欲の尊重でも、特定の学習内容の促しや意欲尊重ではなく、子ども自らが計画や目標を立てたり時間管理ができたりするよう家庭で育てていくこともまた重要と言えるだろう。

## 荒牧 美佐子（目白大学准教授）



今回は、幼児期から中学1年までのデータを用いて、10年間の子どもの育ちとそれらを支える保護者の関わりについての検証を行いました。その結果、幼児期の読み聞かせや、子どもの意欲を尊重したり、子どもが自ら考えることを促したりする関わりは、中学生での言語的なスキルに直接的な影響は及ぼしてはいないものの、小学校低学年での子どもが本を一人で読む頻度や、学びに向かう力を支えていることがわかりました。そして、それらが積み重なる形で、最終的には中学1年時点での言葉スキルや論理性に関与していることが明らかとなりました。つまり、幼児期における保護者の関わりは、数年先（小学校高学年～中学生）の子どもの言語発達に決定的な影響を及ぼすほどの強さはありませんが、少し先（小学校低学年）の子どもの学習態度や「がんばる力」などの社会情動的スキルの育ちを支える土台となりうるという意味で重要だと言えます。

また、読み聞かせ活動に関する分析結果から、保護者の関わりは、子どもへの一方的な働きかけであるよりも、本に触れる楽しさを子どもと一緒に共有するなど、双方向のやりとりであることの方が効果的なようです。こうした伴走型の関わりが、小学校入学後、子どもが本を読むことを習慣づけ、結果的に言語的なスキルの向上へとつながっていると考えられます。「意欲の尊重」や「思考の促し」といった関わりも、子どもに寄り添う養育態度と捉えれば、同じことが言えそうです。

ただし、これらは幼児期から小学校低学年あたりまでは効果がありそうですが、高学年での子どものスキルの発達を支えるには十分とは言えないかもしれません。全体的に子どもへ関わる量そのものが減るとともに、子どもの年齢や発達に応じて、保護者の関わり方にも変化が生じていることが考えられます。例えば、学力などの認知的なスキルの向上に関しては、単に寄り添うだけでなく、より具体的な学習方略について指示することが関連しているかもしれません。これらのことについても、今後、引き続き分析が必要です。

## 都村 聞人（神戸学院大学准教授）



本調査の特色は、第1に子どもの「学びに向かう力（非認知的スキル・社会情動的スキル）」と「認知的スキル」が年齢とともにどのように変化しているか、そして子どものスキルの発達に保護者の関わりがどのように影響しているかを明らかにすること、第2に年少児から中学1年生（2021年時点）まで同じ調査対象者（保護者・子ども）を追跡的に調査することにより、子どもの発達に影響を与える要因などをより詳細に分析できることにあります。

「学びに向かう力（非認知的スキル・社会情動的スキル）」に関して、今回の分析結果では子どもの年齢の上昇にともなって低下もしくは停滞しているようにみえるかもしれません。しかし、本調査では保護者が子どもに対して行う評価によって「学びに向かう力（非認知的スキル・社会情動的スキル）」を測定しているので、子どもの年齢が高くなるにしたがって、保護者が子どもをみる評価基準が厳しくなっている可能性などを考慮する必要があります。

保護者の関わりのうち「思考の促し」に関しては子どもの年齢が上がるにつれて、頻度がおおむね減少傾向にあります。これは保護者と子のコミュニケーションのあり方が年齢とともに変化しているためと考えられます。しかし、p.18～19の分析結果によれば、「思考の促し」は中学1年時の認知的スキルにも影響を与えており、保護者から子に対する重要なアプローチのひとつといえるでしょう。

また、本調査の対象は子どもが中学1年生の段階で新型コロナウイルス感染症拡大の状況におかれており、それに伴うさまざまな制約や教育方法のやむを得ない変更が、子どもの非認知的スキルの発達や保護者の学習面の関わりに影響を与えている可能性があります。各種調査の結果と照らし合わせながら、その影響を今後慎重に検討する必要があります。

調査対象の子ども（2007年4月～2008年3月生まれ）の生育史と時代環境

西暦 (調査対象の子ども)	保育・教育界 ★は保育・幼児教育関連	デジタル関連	社会一般
2007年（誕生）	学校教育法改正	YouTube日本版	
2008年（0～1歳児）		Twitter日本版	リーマンショック
2009年（1～2歳児）	★幼稚園教育要領・保育所保育指針の実施（幼児教育の重要性）		
2010年（2～3歳児）		iPad Instagram日本版	
2011年（年少児）	新学習指導要領（小学校）実施 （授業時間数の増加、小学校で外国語活動の必修化）	LINE	東日本大震災
2012年（年少～年中児）		スマートフォンの世帯 保有率が約5割に	
2013年（年中～年長児）		『妖怪ウォッチ』	
2014年（小学校入学）			消費税8%
2015年（小学1～2年）			女性活躍推進法
2016年（小学2～3年）		・『ポケモンGO』 ・Society 5.0	出生数100万人を下回る
2017年（小学3～4年）	★待機児童数がピークに	・『Nintendo Switch』 ・TikTok日本版	
2018年（小学4～5年）	★幼稚園教育要領・保育所保育指針・ 幼保連携型こども園教育・保育要領 の実施 ・道徳の教科化		
2019年（小学5～6年）	★幼児教育・保育の無償化 ・GIGAスクール構想		・働き方改革 ・消費税10% ・SDGs推進への動き
2020年（中学校入学）	・新型コロナウイルス感染症の拡大による 休校措置 ・新学習指導要領（小学校）実施 （小学5、6年で英語教科化、小学校 でプログラミング教育必修化）		新型コロナウイルス感染症 の拡大
2021年（中学1～2年）	・公立小中学校に1人1台端末広がる ・新学習指導要領（中学校）実施		・東京オリンピック ・大学入学共通テスト スタート
2022年（中学2～3年）	・新学習指導要領（高校・年次進行） 実施		成人年齢が18歳に
2023年（中学卒業）	こども基本法・こども家庭庁発足		

調査対象の子ども（2007年4月～2008年3月生まれ）の生育史と時代環境

本調査対象の子どもたち（2007年4月～2008年3月生まれ）は、乳幼児期にデジタルサービスが次々と登場しはじめる一方、リーマンショックや東日本大震災で社会や経済が厳しくなる環境を過ごした。小学校では、2011年に改訂された新学習指導要領により、授業時間数が増加し、小学5・6年での外国語活動が必修になるなど、“脱ゆとり教育”を目指した学校教育を受けている。社会では、女性活躍推進法や働き方改革、SDGs推進への動きなど、日常の過ごし方が見直される時期を過ごした。

小学校卒業と中学校入学の時期に、新型コロナウイルス感染症が拡大し、休校措置が取られ、授業や行事の変更があった。中学校は新型コロナウイルス感染症の流行による社会や経済状況の変化のなかで、学校生活や放課後の活動に制限を受けながらも、公立小中学校の1人1台端末の普及等により、オンラインによる学びや活動が広がっている。

## 幼児期から中学生の家庭教育調査研究会

無藤 隆(白梅学園大学名誉教授)  
秋田 喜代美(学習院大学教授・東京大学名誉教授)  
荒牧 美佐子(目白大学准教授)  
都村 聞人(神戸学院大学准教授)

高岡 純子(ベネッセ教育総合研究所主席研究員)  
田村 徳子(ベネッセ教育総合研究所研究スタッフ)

※肩書・所属は、刊行時点のものです。

本報告書はベネッセ教育総合研究所の  
ホームページからダウンロードできます

ベネッセ教育総合研究所が実施している各種調査の結果も、こちらからご覧いただけます

ベネッセ教育総合研究所

検索

<https://berd.benesse.jp/>

引用・転載についてはこちらをご確認ください  
<https://berd.benesse.jp/application/>

幼児期から中学生の家庭教育調査 縦断調査 ダイジェスト版

発行日:2023年9月15日

発行人:野澤雄樹

編集人:加藤健太郎

発行所:㈱ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

企画・制作:ベネッセ教育総合研究所 〒206-8686 東京都多摩市落合1-34

デザイン:神田有希子

\*無断転載を禁じます。

© Benesse Corporation  
Benesse Educational Research and Development Institute

0TT002